

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-190	16-023	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名（原題／訳）		
Moderate Alcohol Consumption and Chronic Disease: The Case for a Long-Term Trial. 中等度の飲酒と慢性疾患との関連～長期臨床試験の実施に向けて～		
執筆者		
Mukamal KJ, Clowry CM, Murray MM et al.		
掲載誌		
Alcohol Clin Exp Res. 2016 Nov;40(11):2283-2291. doi: 10.1111/acer.13231.		
キーワード		PMID
ランダム化比較試験、摂食試験		27688006
要 旨		
<p>中等度の飲酒が慢性疾患に及ぼす影響に関しては、観察研究や短期の臨床試験による報告が多く、有効か有害か議論の一致をみていない。本研究では、中等度の飲酒と慢性疾患との関連について得られている知見を整理し、長期の臨床試験を実施していくため考慮すべき点について検討した。</p> <p>臨床試験としては、米国では 1993 年に閉経前後の女性に対するクロスオーバー試験が実施され（飲酒期間は 3～4 ヶ月）、飲酒により閉経前後いずれの女性でも血中 HDL コレステロール値が上昇することが示された。当試験ではすべての飲食物が対象者に提供された。また、12 ヶ月以上実施されたすべての臨床試験では、対象者が普段飲用しているアルコール飲料が使用された。その他これまでの知見を整理すると、長期の中程度飲酒介入試験の実施に向けて考慮すべき点は、以下の 7 つにまとめられる。</p> <p>①アルコールを含む複雑な食事介入は可能である、②対象者の忍容性を最大化するために対象者の文化的背景を考慮したアルコール飲料の選定が有効、③試験脱落を防ぐため介入群の飲酒量を十分検討せよ、④インセンティブを与えたり補償を行ったりすることも有効、⑤対象者にとって介入群・対照群ともに魅力的に映るよう工夫を、⑥評価したい慢性疾患のハイリスクな対象者を登録すると忍容性が高まりやすい、⑦これまで多く用いられているエンドポイントを設定せよ。</p> <p>コメント：</p> <p>上記 7 点のポイントに関して、詳細な論拠については紙面の関係上省略した。各自原著を参照されたい。</p>		